

北海道 8 6月13日

13日 昨夜は大雨、9時ころ眠りについたが、11時と3時に目が覚めた。朝の7時、雨は止んだかと喜んだが小雨・霧雨がしとしとである。コーヒーを飲み、昨夜の残りのパンを齧って、「ちょい走るか」と土の駐車場を走り出した。駐車場は小さいグラウンドぐらい、10分たち、「もうちょい」30分たち、「まだいける」とおおよそ1時間走った、ヤッケのフードをかぶり長靴で走る、オジン走りのオジンですぞ。

キタキツネがやって来た。彼らは北海道のどこにでもいる、人慣れしているのか、近づきたいのか、餌がほしいのか、それでも10Mぐらいまでしか近づかない。手でもあげようものなら慌てて飛んで逃げる。8時になってまた雨脚がきつくなった。空は明るいので昨日のような本格的な雨ではないが、見通しは暗い。気象庁の方、言葉が濁していたが、「ぐずぐずが 続きますよ」という意味だったのかな。

9:30 飯を食い、「ちょい散歩」と池のふちなど歩く。霧が出てオンネトー湖は絵葉書のように美しい。

12:30 空は明るい霧雨が降ったりやんだり、衣川さんがホテル泊からやってきて旨いものでも作ろうと調理をし始めた。彼は大きな箱からコンロ、鍋、材料を取出し、ゆっくりと丁寧に包丁でカット、味見をしながら旨いものを造る、オレの、「なんでもいい 食えればいい」とは大違い。「尾岱沼（おだいとう）まで行きましょう」という誘いに、この雨では絵も描けない、スケッチでもしながら海を見に行くかと車を走らせた。

双湖台というPに車を止めて景色を見る。北海道の道にはいくつかPが設置してある。観光目的か雪で右往左往する人のためかな。湖が二つ見えるが全体に霧がかかって上のほうは見えない。この地域、針葉樹と広葉樹が半分ずつ、黒い円錐形と明るい球、そんな緑が印をついたように次々増殖して伸びているさまはなかなかいい、そういやこの図柄、日本画の東山魁夷かな、これなら売れるね。とここでミニ事件発生。後ろからもう一台が駐車して降りてきた若いお母さん風女性がぎょっとしている。「？」なんと俺の車の左側にメロンパンの何倍もある黒い塊、「がはは オレのウンコじゃないよ クマ君だねえ」棒でつついてみようかと思ったがやめた。

北海道の道、はるか向こうまでまっすぐに続く。「そらあ みなさんスピード だしますね」「これなら高速道路は いらぬよね」そのまっすぐ伸びる道路の両側は草原、畑でも田圃でもなく草原だ。牛や馬のエサ用草を育てている。刈り取っては丸めてロールにして、白や黒のビニールで包んで積んである。時間が経つと中の草が発酵して旨い餌になるのだとか。冬は真っ白になるのだろう。北海道の雪の季節は何月頃から何月頃までかな。

尾岱沼に近づいてきた、海がもうすぐのようだ、山ではなく丘の緑がうねっている。気に入る景色があるかな、いいイメージが湧くかな、なんだか天気はよさそう、海に居続け絵を描くか、もう一度オンネトーに戻って、居続けるか、今晚寝て決めよう。もう一度雌阿寒岳に登りたい。キャンプ場の前に、野付半島を走った、トンビの群れ。「トンビ じゃないね まさか ワシ オ オジロワシだ すごい」これでシマフクロウを含め猛禽類 2種見たことになる、いややトンビも猛禽類だったかな。考えればあと4泊、なんとか絵をやっつけたい。「ほんと雨は やだよ」とぼやき節。夕方キャンプ場に車を乗り入れた。800円也。ここの地形はケタイな地形、海の前に灯台がある。明日は晴れたらここで絵を描こうと思っているのに空がだんだん暗くなってきた、雨が降ると野外で絵は描けない、困ったことだ。

夜9時をまわっている、いささか酔っぱらってきた、ウイスキーが美味しい。オレ 65歳ぐらいから酒量が減った、それまでは毎晩飲むのが日課だった、夜になると台所においてある酒をコップに、冷蔵庫に入っている旨い物を皿に入れアトリエで仕事をしながら飲んでた。一杯目が終わるとコップと皿を持って再び台所へ、一杯目と同じように二杯目を、同じく二皿目をもってアトリエへ、という日課だった。当時、酒を一日やめただけで我ながら驚いていたが、一年二年経ち、三日間やめ四日間やめ、という数字が出てきた。今回の北海道では毎日のようにアルコールが進んだ。酒量が減ると体重も減った、これは同時に食う旨い一皿のせいだったか。

北海道9 6月14日

14日 昨夜はウイスキーを飲みすぎたのか、4時に目覚めてしまった。北海道は朝の3時半ごろから明るくなる、そんな気候に慣れてしまった、暗くなったら眠り、明るくなったら起きる、アウトドア生活だ。寒い寒い、寒いけれど、大阪での冬の普段着、上下の温か下着を着こみ、ダウンの防寒具、ヤッケのフードを頭にかぶり、長靴姿が板についてきた。朝からカメラとICレコーダーのデータをそれぞれPCに入力、昨日、作り置きのおにぎりをほおぼって腹ごしらえ。ちょっと漁港に、と歩き出した。

漁港のそば、船が岸に上げられている隙間でキャンバスを広げた、3時間ぐらい描いた。風がきつい、頭が痛くなるほどに寒い。地元の人が、「寒い しばれる」とぼやくほどに寒い。

野付半島は漁師の作業場がいくつもある。ひとだかえもある大きな浮球、ほとんどの球がクリーム色だけど、時々、赤・黄・白と妙に色っぽい軍団がある。ブルでワイヤーを引っ張りながら、大きな長い網と球を十人ぐらいの漁師が手入れをしている、そんな作業が何組も見られた。一網打尽の網なのかな。

野付半島資料館では、明治大正昭和のモノクロ写真がいくつもかかっていた。「1940年代といえば オレと同世代の少年少女、ここも 大阪も みんな貧しく 腹が減っていたね 同世代ということは まだ健在かなあ」

尾岱沼の梅で、漁師の網にかかったマンモスの歯も出ているようだ。シベリア・アラスカでは、1~7万年前に生息していたが、このものは5万年ぐらい前のものらしい。

先ほど、会津と書かれた標識があったが、江戸時代、会津藩士がこのあたりに、開拓と北方警備に送り込まれ、この地で没した人がいたようだ。目の前に、国後島。根室や釧路は霞んでいる。「こんなに近けりゃ・腹立つね」

野付半島の付け根の街で食事。衣川さん、慣れないスマホで、「何処か 美味しいところ」と検索するが、時間がかかる、数軒回って、廃線になった元駅前の食堂で刺身定食 1500円。北海道に来る前に、「海鮮丼を 二回ぐらいは 食いたい あとは 粗食時でいい」と言っていた、期待したほど旨くないが、つべこべいうまい。札幌などの大都会では期待通りの旨い海鮮丼が食えるかもしれないが、観光客の少ない地方の町ではいいものは無いようだ。ただ旅館やホテルでは、「美味かった」と衣川さんの弁。故吉谷は、「あいつといくと 美味しいものが 食えない」と生前にイクちゃんにぼやいていたそうだが、衣川さんは、5.6泊去れたかな、美味しいものを食ったみたい。5000円足らずでガソリンを、「オンネトー に戻ろう 次は 帰りの船内で 会いましょう」と別れた。

30分も走ると、陽が差してきた、ちょっと車を止めキャンバスを広げた。牧草のうねりがいい、草原がうねって丘の麓まで広がっている。富良野ではそこに花が、作物が植えられ、「きれい」と思ったが、草だけのうねりも、富良野に負けないようにきれいに描いてやろうじゃないか。

またすすんで、道をそれ牧舎のスケッチをした。昔ながらの北海道の牧畜農家、というような懐かしい建物はもう姿が少ない、昨今の牧舎は都会の町工場風、横に建つ自宅も大阪と変わらない近代プレハブ住宅、こんなことをぼやいても仕方がないねえ、だがその土地の風土、景色、顔つき、そんなこんなが見たいし欲しい。「ここは何にもないよ」というのがいい。

Pで休んでいると、「バツバツバ」格好いい単車にまたがった兄ちゃんが下りてきて風景を眺めている、「なんと ずんぐりむっくりの 小さい男」なんて言ってはいけないねえ。

途中に町があり、スーパーによって、晩用の弁当、いくつかのパンを買った。「摩周湖で寝たら」と衣川さんの勧めで向かった。夕方からしとしと降りだし、だんだん降りが大きくなってきた。摩周湖まですぐなので車で登って行った、ぶんぶん回るワイパー、500円の無人の駐車場、階段を上がるとなんだか下のほうに水面のようなものが見えるが、霧の摩周湖ならぬ、看板だけの摩周湖、車の中で弁当を食って、「ここはだめだ オンネトーへ」と走った。湖というのは平地に在りすぐそこに湖面があると思っていたが、北海道の湖は火山でできた穴に水が溜まったものがある、上に登ると湖があるというものだ、川の水が流れ込んだ湖では無いようだ。

北海道 10 6月15日

15日5時前に目覚めた。昨夜はオンネトーの駐車場に8時ころ着いた。飯は摩周湖で弁当を食った、ビールを一杯飲んで9時に寝たが、11時と2時にトイレに起きてしまった。朝5時に起きたがまだ雨が降っている、カメラ・ICレコーダーのデータをPCへ、簡単食事、「これでは絵も描けないし もう一度登るか 濡れねずみになるのは やだねえ」。昨日海からの道中でバケットパンを買った、北海道ではパンを食べないのかと思われるほどにパンが店に置いていなかった。中標津（なかしべつ）を通っていると大きなマーケット、日本のどこにでもあるそんな場所を見つけパン屋も見つけた。卵・レタス・トマトをマヨネーズで混ぜ、バケットに穴を開け、どんどん詰め込んで弁当にした。これは昼に食ったがなかなかのものだった、次回帰ってからこれだ。

◎雌阿寒岳は四日前にも登っている、昨夜は車に打ち付ける雨の音も大きかった、気温も下がっているのか、シラフの上に毛布を二重にかけたがそれでも寒さを感じた。まだ下着の防寒具は持っていたがじゃまくさいので出さなかった。登ろうと決めた時点でまだ小雨が降っていた。旅先で山の上、雨に打たれて、風邪でも引いたらと恐れたが、山の魅力が誘惑がまさっていた。駐車場の車から出てきた人、「登るの?」「イエス」その人もオレにつられて登ってきて追い抜き、頂上でも会った。もう一台から女性のペアが登っていった。

◎1時間ほどで先日も休憩した河原に出た。ガラスのかげらのようなものが落ちている。「誰だ 瓶を割った奴は」なんて本気で思ったが、また在る。「???」手に取ったが、ガラス?また在る。ふと横を見るとガラスの破片がたくさん、「いや まて これは氷」「なんだ 霜柱か イヤ」ハイ松の葉を見ると氷がひっついている、それが朝の気温上昇で落ちてきているのだ。上にいくほど量も大きさも半端じゃない。1時間で河原までやってきて休憩、女性の二人組がふたつ、一組はここで、もう一組は頑丈そうな白人だけれど、少し上から下った。

◎氷がだんだんすごい、製氷機でつくられたような氷がハイ松の葉に枝に、岩に着いている。後から聞いたが、「エビのしっぽ」だという。2,3人の人が登っているがどなたに聞いても知らないという。樹氷でも霧氷でもない、昨日の雨が氷点下でたちまち凍り、透明な氷になったようだ。岩に着いているものは今の朝の気温の上昇で、別の生き物のように、まだらに透明にボコボコひっつき岩を覆っている、寒天状の透明泥が岩を覆っているのか、このボコボコ生物め。寒くなってきた、手袋をはめジャンパーを着込んだ。まさかいらないだろうと、オーバー手袋は車のなか、毛糸の帽子は出るときに躊躇したが、家においてきた、これじゃ冬の山だ。

◎てっぺんまでもう少しという所で道を間違えた、上の標識を見ながらコースを外れ時間をくってしまった、なんだかすいすい歩けないね、ごろごろするね、と思いながら。といういつもの失敗を付け加えておきます。

◎3時間でてっぺんにやって来た、というよりこの山はどこがてっぺんなのかわかりにくい、河口のふちに到着してからだらだら登っていく。先日よりも少しは火口の中が見えるが、底は見えない、池も煙の噴出孔も見えない。垂直に切り立った岩が、赤に黄に、クリーム色に黒に、爆裂の後を思わせる。

◎先日もそうだったが、硫黄の臭いは身体に悪いのかね、どうも、ふっとする。幼児のころのトラウマが頭をよぎる。親が掘りごたつに豆炭か練炭かを入れていた。寒いので蒲団を顔のほうに寄せていたらどうも失神したらしい。親の後日談だが、「あんた こたつに頭を つっこんだら あかんよ」とおおいに笑われた。オレはどうも身体に悪い煙に弱いらしい。火口の臭いも温泉の臭いも身体によくないはずだ。

◎今日は来た道を下山した。帰りはだらだらスケッチをしながら下った。今まで山は登るもの、1時間ワンピッチ2,3分休憩に一本取ったらすぐ出発と決めていた。「山の中には オレの 絵になる形が あるではないか」と、七十歳を過ぎてやっと見えた。面白い素晴らしい、小さいスケッチブックに鉛筆を走らせた。

◎上の岩には氷が30,40センチも付いていた、すごいものを見せてもらった。登りはずっと雨が降っていた、雨具もザックもポシエットもずぶ濡れだ、ポシエットの中のカメラもそうとう濡れている。2時に駐車場まで降りて来た、「風呂はどうしよう 湯冷めでもすれば」と思案したが、まわりはなんだか晴れてきた、「え 久しぶりの 晴れの 天気ではないか 北海道に来て こんな穏やかさは はじめて」まずカメラを車の中に、濡れたものをぬぎ、350円の風呂に入った、熱い湯が心地いい、さっぱり着替え、「ちょっとここで絵を描こう」

北海道 11 6月16日

16日 昨夜は寝る前に外でパソコンをしていた、1時間ぐらいで身体がチンチンと冷え、「これは 寒すぎる」と慌てて車の中に入った、寝床に潜り込んだが、いったん冷え切った身体はなかなか温かにならない。朝の車中の温度が4度だった、外はもっと寒かったかも、大阪の真冬だ。昨日の昼の硫黄温泉の熱さが懐かしいと思いつつ、誘眠剤を半分飲んで寝たが、案の定2時間ぐらいでトイレに起きた、次に目覚めたのはもう5時だった、しかもまだ眠いとぐずぐず30分ぐらい寝床にいた。誘眠君はなかなか優れもの。そうそう昨夜やっと星を見た。

朝の9時、陽が照ってきた、なんとうれしいことに晴れてきた、まだ快晴ではないけれどすぼんやりと陽のある場所がわかる、「さあ 今宵も オンネトーのキャンプ場に とどまるぞ」車内を片付け、湯を沸かしながら、1時間オジン走り。朝飯はスーパーで買ってきたパン、大盛りのごはん、みそ汁、ふりかけ、なかなか旨い。大阪では体重が70Kだったが、68Kに落ちている。キャンバスを広げた、絵の具を出した、色を入れた、今日は描ける、今日は乾く、初めてのお陽さんだ。描きながら昨日濡れたものをだし、車の上、石の上に並べた。雨具1時間ぐらいで乾いたが、ザック、靴、ポシエット、防寒ジャンパーは半日かかった。このあたりで有名な、アカエゾマツの葉は赤黒い、ほかの広葉樹も負けじとひょろり背が高い、ICレコーダーの音声を聞きながら、キツツキの音が聞こえる。毎日のように同じ上の方の場所で、「こんこんこん」と響くが姿は見つけられなかった。「しばれる」という言葉はじめて聞いたわけじゃないが、言われると新鮮だ。昨日も山の上、「こんなにしばれたら すぐに雨が氷になってしまう しばれるねえ」

今日は土曜日なので、北海道も大阪も同じように、続々と車がやってくる。ここに駐車する人のほとんどが、登山服に着替え、鈴を鳴らして登っていく。続々というわりにはたった8台だったが、そのうち3台は仕事の人だ。早朝一番に車を止め、暗くなりかけたところに降りてきた青年二人、おそろいのスタイル、背に蛍光のチョッキ風にヘルメット「お仕事ですか」「チジキを調べています」地磁気のことだろうと思うがそれ以上は無知の世界、帰って調べてみよう。<友人の上田先生からの情報：地球電磁学という分野、地球内部から宇宙空間という広い分野にまで及ぶ研究。世界的に（日本のデータも含め）各所の地磁気データが集められ観測されている。雌阿寒岳では、火山活動に伴う磁気の変化を調べていたのかな。地震でも磁気の変化は変化するらしい。気象庁：地磁気観測所の人らしい、最初に見た人たちとは違うグループかな。気象庁とはお天気おじさんのいるところぐらいにしか思っていなかったが、そういえば、地震、火山噴火でも気象庁の人が説明している。> もう一組は登山道整備の人。四合目と書かれ折れた角材標識を担いで帰って来た。木製の角材ゴミなのに担いでここまで降ろしてきた、木だから捨てるでもいいのにね、重いのにすごい。登山道整備、これは見るたびに頭が下がる、まして無償でやっている人たちには、「ありがとう」の一言だ。

なんとザックを担いだおっさんがやってきて、「ああしんど」とオレの横でへたり込んだ。その後晩飯をおごり話をする事になるが、その話はあとで。昔はザックを担いで北海道の道路を歩いて旅している人を何人か見たことがあるが、今回の旅では彼が初めて、40Lぐらいのザックに、シラフとテントをくくり付けやって来た。昨夜の雨の中、阿寒湖あたりのコンビニで、3時間ぐらいぐずぐずしていたらしいが、もう居づらくなり思い切ってここオンネトーに向かったという。6、7時間歩いたのかな。彼が、「明日 雌阿寒岳登りたい」という、靴は運動靴らしい。昨日も運動靴の若者が登っていたが、すってん転んでいた。晴れば登れないこともないが・・・。一日中晴れた、気持ちよく描けた、濡れたものも気持ちよく乾いた。

黒い岩に水が流れる湯の滝まで散歩。ログハウスの立派な休憩所、ここに解説文があるが、半世紀経ち、間違った部分もあるかなという感じ。昭和28年ここにマンガン鉱床があり3500T採掘された。今も微生物が温泉水からマンガン鉱床を成長させている。35億年前微生物が生まれ、光・水・二酸化炭素から酸素を生成した。

北海道 12 6月17日

17日5時に目覚めた、たっぷり寝た、睡眠時間が十分だと体が軽い。だんだん飯のコツも覚えた。いつものように駐車場をぐるぐる走った、走っている間、コンロに火をつけ、ご飯をゆでた。弱火で1時間もゆでるとほっこりごはん、わかめいっぱい味噌汁、ふりかけに、ゆで卵、レタス、腹いっぱいだ。

昼過ぎまでうろうろスケッチをして、ここ、オンネトーを去る。港までふらふらどこかでもう1泊して船に乗ろうと思う。晴れた今日の一日、だらだら絵を描いた、このだらだらがよかった、最後にイイ絵ができた。なんの気なしに入れた一色が、効いた、「お イイ」よがりの雄叫びをあげた。絵は、「イイものを描こう イイものを造ろう」とうじうじしたところで、イイものはできない、できるときにしかできない、しようと思ってもできない、なので、イイものに会えた今はうれしいねえ。今回の、「ふらふらペインティング北海道Ⅱ」大いに楽しめた、雌阿寒岳も、オンネトーも、ほかの人にとってはただの観光地かもしれないが、オレにはじわじわ霊気が伝わってきた、どこかに精霊がいる。最後になってやっとイイものがつかめた、やったぜである。

森の中をチリンチリンいわせながらきよろきよろしている。木々の間を歩いているととにかく気持ちがいい。何か面白いものがないかと歩いている。先ほどから白い小さい花がいくつも落ちている、たぶん横にある大きな木の花、ずっと高いところから小さい花の付いた枝をいくつも落とすのは、鳥か、サルか、なにをしているのかな。背の高い木に大きな穴がいくつも、キツツキ君、同じ木に集中攻撃か、ここらあたりのキツツキはカラスぐらいの大きさ、そんな身体が入るぐらいの穴が五つ六つ、これじゃ木もたまらんね、枯れるね。

「今日は 雌阿寒岳が 見えるよ」と管理人さんに言われ、「それじゃ 先日 途中まで登った 展望台まで 行こう」と登り始めた。人が来ないこっちのコース、この森はいつ来てもいい。ちらちら雌阿寒岳が見える、これはすごい、登るにつれ、まる見えじゃないか、最後の最後に見せてくれますね、何枚もスケッチをした。こんなすごい山だったのか、上のほうは火山の爆裂の跡がまざまざ、山肌が、岩肌が赤く黄色く黒く、横の富士もおまけにしては堂々としている。よくまあ見せてくれたと感謝。

暑い、寒さがどこに行ったという感じ、力を出して登ると汗が出る、旅の終わり、体力もなくなってきている、ゆっくり道草を食って歩いた。

苔やら地衣類君たち、雨が止んで乾燥してくると、色も褪せている、彼らには雨がよく似合う。

粘菌を見つけた。「たぶんあれは ほんまものの ねんきんせいかつしゃ」オレンジ色のビラビラがきれいだ。

2時、お世話になった、オンネトーから出発、ほんとにここはよかったね。今回の旅、イイものが見つかった、昔は形にこだわっていたが、今回、「形はあるが そのくずしかた」「形なんて 何か別のものと 絡ませると いい」「形は大事だが イイ絵のほうがもっと大事」という声が聞こえた。魔性の声が響いた、「従います マモノさま」「おまえ わざわざ北海道まで行って こんな絵か どこでも描ける絵じゃないの・・・」「ぬかせ ほざけみじゅくものめ」

車を走らせながら、来た時の道に戻ろうか、まっすぐ南に下って、襟裳岬の手前を横切ろうか、「どうする どちらだ」松山千春のポスターのあるところで地図を見て思案した。スーパーで、船用のパンとレタスを買った。大樹(たいき)というところがある、その名前をナビに入れ出発した。相変わらずまっすぐな道、ほとんど車のいない道路ながら制限速度50Kの道を60Kぐらいで走っていると、どんどん皆さん追い抜いて行く。黒牛、乳牛、馬、畑も大きい、ブルドーザーで苗植えやら葉撒きやら、スケールがでかい、人も車も少ない。

大発見、畑の中に「丹頂鶴」がいた、白い身体に、黒い部分、あれはまず丹頂ですよ。あんまりでかくない。

またまた、大びっくり。大樹を目指していたが手前に、「虫類(ちゅうるい)」という道の駅がある、キャンピングカーがたくさん止まっている。ここでもいいかもと駐車した。ここはナウマンゾウの化石が出たらしい。ちょっと散策とぐるり歩き出したら、草の生えた広場にもいくつかの車やらテント、「ここは 無料開放ですか」「無料だよ みんな泊まっているよ」という。ここで寝ようかと車に帰っている道中に、「おかむらさ〜ん」なんと衣川さんじゃありませんか。彼は道東に居続け、最後の日に高速道路を吹っ飛ばし、5時間ぐらいで帰ると話していたので、こんなところでしかも偶然再会するとは、大びっくり。

北海道 13 6月18日

18日朝、同じように5時に目覚め、「1時間ほど速足で歩こう」と山の方に向かった。車など走っていない二車線の立派な道、そこからスキー場という看板に添って砂利道を上にあがる。ひとっこ一人いない所、例の鈴はチリンチリン鳴らしている。てっぺんから麓を見ると、虫類の村が半分見える、のどかな田園地帯の真ん中に道の駅・温泉施設・ナウマンゾウ博物館・公園という近代的な設備が並んでいる。暖かい、先日来の寒さ、寒波のことを想うと暖かい、歩くと汗が出てくる。

車に帰って、ご飯に味噌汁という朝食、茶を飲んでくつろいでいると、我々の車の大阪ナンバーを見て、三重ナンバーのおっさんが、「大阪で地震があったみたい」という。慌て、車のラジオを点け聞いた。衣川さんはご自分のスマホで家族に連絡しているが不通のようだ。しばらくしてオレの娘から、「全員無事だけど アトリエ ぐちゃぐちゃ」と衣川さんのスマホに連絡があったと伝えてくれた。道路沿いの公衆電話で家にかけてみたが、混んでいるということで不通だった。「全員無事」という言葉を聞いて安心した、それ以上は考えなかった、水が、電気が、食料が、ライフラインが、なんて考えてもいかんともしがたい、帰り着くまでにはまだ二日間ぐらいの時間がかかる。とはいえ、高槻・枚方・茨木という地域限定の直下型地震と聞き、家に電話が通じる半日は気が重かった。ただ今日でよかった、オレの旅の最後の日、移動だけを考えたらしい日、ということでは救われた。旅の途中で地震と知れば、おちおち絵だ、山だ、といっておれない。ただ驚いたのは、「寿栄小学校で 女子児童が ブロック塀の下敷きになり 亡くなった」というニュースにはびっくり。オレが月2回通っている場所、今回の旅も、寿栄講座がある第一と第三木曜の間をこの旅の日程にあてた。帰った翌々日には寿栄に出向く予定だったが、帰った時点で、「休講」の連絡が入っていた。後日談だが、避難者救済のため一カ月以上かかるようだ。

大樹という名の道の駅、そこにほんまものの鉄道の駅舎の跡がある、ホームがある、ポイント切り替えのがっちゃん機械がある。北海道の鉄道はどんどん廃線化が進んでいる。先日会った大工さんが、「北海道の公共乗り物は値段が高い」とぼやいていた。オレの同年配の人たち、「ザックを担ぎ 列車に乗り ユースに泊まり カニ族といわれ」と懐かしい話をする。残念だがオレはそういう覚えがない、ひとりでも仲間とでも旅は少なかったね。大樹から半島を横切るように走る道、天馬街道と記されている。左右に山ボコボコ、草原があり白樺の幹が緑を引き立て奥に入るにしたがって小高く森が続く。きれいなところ、雨が降ってきたのか樹々も、オレのころも洗われる、いやオレのころはもはやきれい、ゆっくりゆっくり走る、気持ちがいい、素晴らしい。

ザックを担いで北海道を歩く男、大阪高石市の大工だという、53歳でもう大工をやめたという。「疲れたあ」と絵を描いている横にへたり込んだ。「それじゃ 今晚 飯を ご馳走するよ」夕方になって、彼と二人でベンチに腰掛け飯を食った。鍋に水を入れてスパゲティーをゆで、玉ねぎをきざみ、炒め、付属のルーと麺を絡めた。「飲める?」「ビール一杯でダメ」缶ビールを渡し、オレはウイスキー。「明日午後2時ころに ここ オンネットーを出るから 好きなところまで 乗せていくよ」と言っていた。翌朝、車に座っていると、「お世話になった山に登ってきます」「2時ころまで 居るから」と別れたが、2時には来なかった。7時間あれば一回りできるはずだが・・・名前も聞かなかった。彼は、「おやじさん」という、誰のことかと思ったらオレのこと、20歳近く年が違うのだから、「おやじさん」も悪くないか。大工といっても、昔風の大工、機械は使うが、のこぎり、かな、というような古い道具を使って、本瓦、土壁、木の建具なんて工事をしてきたようだ。語録を二三。上等のカナが30万円ぐらいする、一年ぐらいかけて台を、刃を調整してやっと使えるようになるという、今も箱に入れしまっているが使っていないのでまた調整に半年ぐらいかかるかな。仕事はいつも地下足袋、指全部に力が入る、落ちるといふ最後の時に小指が落下を止めてくれる。木の柱と梁を組んで垂直水兵を確認してから、ヒウチで締める、これでもう動かない完璧。もうそんな家が欲しいという客がいなくなった、今は格好のいいプレハブやら、ツウバイフォー工法しか売れない時代、昔ながらの大工は用済みの時代だという。

北海道 14 6月19日

19日この旅の最終日だ。昨日の一日は、港に向かってただ進むだけの日になってしまった。到着の翌日見た資料館にもう一度行きたかった。そこには北海道の動物・植物・アイヌ・開拓・明治から昭和の写真、それらをもう一度見たかった、最初の日に見たが、ずいぶん違った目になっている自分を見たかった、時間切れであきらめた。北海道の道はまっすぐ一直線にどこまでも続く、だれが線を引いたのかねと不思議な光景だ。普通なら地球の形そのままに、川やら山やらに沿ってたら曲線があるのだけれど。

夜中日付が変わるころ船は出航した。早速風呂に向かった。十泊の旅行中二度温泉に入ったが、その温泉、雌阿寒岳麓の温泉は硫黄の臭いプンプン、身体にはものすごくいいのだろうけれど、持参の石鹸が泡も立たない、髪を洗ってもなんだかゴワゴワ、身体も滑り止めを塗ったようで、快適だが、身体を洗ったという感じはしない。というわけで船内の風呂で2回も石鹸をつけ身体を洗った。シャンプーもたっぷりつけ、髪を洗った。往路の船の風呂以来、復路の船の風呂までまともに身体を洗えなかったとは苦笑のかぎり、ま、しばれる寒さが続いたから許せるよね、2回温泉にも浸かったことだし。

朝6時、船の中、洗面歯磨きの後買い置いたパンと水を持って後部甲板に出た。客が少ないようだ、一般客は20人ぐらいかな。お陽さんが出ている、暖かい、シャツ一枚で快適だ。往路の時は、ダウンを車から持ち込んでおけばよかったと悔やむ寒さだった。北海道から出航してまだ四分の一の6時間ぐらいしか経っていない、進行方向左手に山が見える、東北の山かな、津軽海峡は出たのかな。昨夜は船の乗り場に3時間も早く着き、パソコンを動かしているうちに眠くなった。1時間ぐらい爆睡、慌てて起き、「まだまだ車は動かせない」とひと安心、となりの列にも車が並んでいる。「ドライバーは車にお戻りくださいまもなく乗船です」ヘルメットの係員が切符の点検、「ライトを消して」と誘導、カバンを二つ持って部屋に向かった。10人ぐらいの部屋にはカイコ棚風のベッド、照明にコンセント、シーツが置いてある、清潔な感じだ。ロビーのソファーに一人腰かけ、ビール・ソーセージ・レタス・ウイスキーで1時間ぐらい、それから寝た。

昼過ぎから夕方まで、車を走らせながら電話を探すが、なかなか見つからない、携帯を持たないものの常套句のボヤキだ。薄暗くなったところにやっとマーケットの駐車場で公衆電話BOXを見つけた。「大丈夫?」「片付けで てんやわんや 見舞いの電話で てんやわんや」という返事に安心した。

北海道では人けの少ないところ、車中泊で過ごした。驚いたのは朝明るくなる時間が大阪より1時間早い、3:30ぐらいには明るくなっている。そんなわけで夜は9時ころから寝て、朝は5時ころに起きる習慣がついてしまった。ただ、北海道は季節外れの寒さ、寒気団が居座り大阪の真冬並みに寒かった。船のベッドでも昨日と同じように5時に目覚めたが、行くところも用事もない船内、たっぷり昼寝が待っている。後部甲板で、海を眺めている。船が大きすぎ、潮の香りも漂ってこない、ビジネスホテルで過ごしているようだ。

夕方の6時過ぎ、敦賀港到着まで2時間強、先ほどから明るい光を散乱させている漁火の漁船が十隻二十隻と後部甲板に見えだした。陸地も近くなり、若狭湾に、敦賀港に入っていく。今日は大きな貨物船を4隻も見た。

「8:30 予定通り到着します 車へは 船が 接岸するまで 行けません」というアナウンス。ふたつのカバンをもって車まで階段を降りた。ナビはまだ北海道の港のままというのはなぜかな。ながらく順番を待って地面に降り立った、雨が降っている、本降りの雨だ。眠くなってはいけないと、助手席に水とレタス、ナビを自宅に入れ出発した。敦賀の街なかを抜け、大型トラックに挟まれ、80Kのスピードで狭い国道を走り抜けた。同じ船から降りたと思われる札幌ナンバーのトラックだ。なんと3時間で家にたどり着いた。地震見舞いに下の娘が来ていた。家の前に車を止め、「ガラス注意」と書かれた階段を靴のまま車の中の荷を2階まで運び上げた。洗濯物やら食料やらをとりわけ、ビールを飲んだ、「やっと終わった 北海道 乾杯」である。